

H. Saddhatissa (ed.):

## Uṣākaśājanāikāra

校 部 建

1

校訂者サツダティッサ師はセイロン人。現にロンドンに住む。一九二〇年セイロンで出家し、ヴィドヨーダヤ・パリヴェーナ学院に学んでパーリ語に熟達した。その後数年をインドに送り、ベナレス・ヒンドゥ大学でパーリ及び佛教を講じたが、その間に深くサンスクリットの知識をもたくわえ、さらに他のインド諸語にも及んだ。次に述べるような性格をもつこのテキストの校訂者として極めてふさわしい学者といえる。

2

ウパーサカジャナーランカーラ〔優婆塞人莊嚴〕とても訳すべきか。ビルマでは単にウパーサカーランカーラと呼ばれている。以下UJと略称する)について、われわれは今まで殆んど知るところがなかったが、この書の重要性は南方テラヴァーダ教団では夙に認められていた。既に前世紀の初めセイロンにおいてシンハリーズ語に翻訳されている (Kajaguru: Sinhala Uṣākaśājanāikāra, 1803)。夙に今世紀の初頭、L・D・バ

ーネットは王立アジア協会の雑誌 (IRAS 1901, pp. 87-90) にこの書を紹介して "of a popular and edifying character" と述べているが、その後は久しく学者の注意をひくことなしに終わった。今ここに、セイロンのみならず、ビルマ、コペンハーゲンより合計十一種の写本をあつめてなされた、サツダティッサ博士の精密な校訂によって、容易にこの書に接し得るようになったことはわれわれの喜びである。

UJはその名の示すように在家者のために著わされた書である。「在家者に対する佛陀の教説に関しての、パーリ語で書かれた最も包括的な綱要書」であるといわれている。南方テラヴァーダ佛教は、ともすれば全く出家主義・出家者本位の佛教とのみ解される傾きがあるが、この書のような述作の存在はその短見なることを示すものと言えよう。UJの他にも、Paṭipattisāṅgāla (第十世紀のもの。未刊。UJの序偈の中にその名が見出される)、全篇にわたって引用が見られる、Suttasāṅgāla (一九二九年、コロンボで、註釈と併せて刊行)、Maṅgalatthadīpani (未刊) といった、在家者のための著作が存在するが、叙述が組織的であり包摂的である点でUJはそれら類書より一段と優れたものといわれている。

UJの用語は総体平明で美しいパーリ語であるが、中に、サンスクリットの語 (word) をパーリの語形で用いたり、パーリの語をサンスクリットの意味で用いたりしている。また時には、サンスクリットのカーヴィヤのスタイルにならった長い合成語を綴ったりもしている。UJの著者が豊富なサンスクリットの

知識をもっていたことは疑いない(もつともこのようなパリーリの語のサンسكريット化の傾向はU丁ばかりでなく後期パリーリの述作にしばしば見られるのであるが)。

### 3

U丁の著者は、その奥書によれば、「アーナンダというセイロンの一比丘」である。この書が著わされたと考えられる時代、すなわち西紀第十、十一、十二、十三世紀の頃、アーナンダなる論師が四人知られている。(1)ブッダゴースアの論蔵註に対する復註 *Māṭṭikā* の著者、(2)第十世紀、無畏山スヤギ「寺」派の高僧で、佛教の実践道を説く韻文の作品 *Saddhammapāyana* を著わした人、(3) *Kaccāyana* に基づく文法書 *Rūpasiddhi* の著者 *Buddhappiya* の師で第十二世紀後半の人、(4) *Piyadassi* の *Padasādhana* に対する釈義 *Padasādhanaṣaṇṇe* を書いた人である。ビルマ伝承ではU丁の著者を(1)とし、バーネットは(2)とし、故 A. P. *Buddhadatta* (*Aggamaḥpaṇḍita*) は(4)とするが、校訂者サツダティッサ師は、種々考証の上、それを(3)と結論する。このアーナンダはセイロンの人で(インド人は彼を *Siṅhācarīya* と呼んだ)、タミール族のセイロン侵入の災禍を避けて南インドに滞在中この書を著した。彼の居ったのは、バーンドヤ王国(メガステネースが言及しているから余程古くからインドの南端地方にあったタミール族の王国。第七十六世紀の間再興し、ことに第九十三世紀に栄えた)に属した藩王の一人 *Chōlā-gaṅga* が建てた三

つの精舎の一つで、*Perampalli* と呼ばれるものであった。彼はその精舎の北東なる楼閣スヤギにおいてこれを書いたと自ら記している。

### 4

U丁の内容は九章に分たれる。第一章は「三」帰「五」戒の解説 (*Saraṇastīla-niddeso*) と題されているが、内容はただ三帰依 *ti-saraṇa* の解説である。その章が終って第二章の劈頭に一短文が置かれ、それによってこの書の全体の構成が示されている。ちょうど *Visuddhimagga* の開巻劈頭に置かれた二つの偈(ブッダゴースアはそれを *S. 112* から引用)と似た意味をもつものであるが、これは散文であり、また経典からの引用でもない。その文に曰く、

かくのごとく「三」帰依をなした優婆塞・優婆夷は、戒に住し、ふざわしい頭陀支 *dhutaṅga* を行ずることによりそれを清めて、五種の商いを止め中正な法にしたがって生活を送ることによって「優婆塞の蓮華 *Uṣasakapaduma*」などの在り方に達し、日日、十の福業事 *Puṇṇakiriyavattu* を満足して、障法 *antarāyakaradhama* を断じ、世間と出世間との幸福を、成就すべきである。

第二章以下の標題を示せば、左の通りである。

第二章 戒の解説 *Sīla-niddesa*

第三章 頭陀支の解説 *Dhutaṅga-n.*

第四章 生活の解説 *Ajīva-n.*

第五章 十福業事の解説 Dasapuññakiriyavathu-n.

第六章 障法の解説 Antarāyākaradhamma-n.

第七章 世間の幸福の解説 Lokiyasaṃpatti-n.

第八章 出世間の幸福の解説 Lokuttarasānpatti-n.

第九章 福の果を完成することの解説

Puññaphalasaḍḍhaka-n.

第一章に「三」帰とはいうまでもなく佛・法・僧に対する帰依である(第一章の標題はむしろ Saṅgamanā-n. とあるべきところか)。第二章「戒の解説」では五戒・八齋戒・十善戒が明される。第三章ではヴィスッディマツガなどに挙げられる十三頭陀支の中、「一坐」「食」「支(受一食法)」と「一」鉢食支(節量食または不過食)とを説く。前者は一日一食を、後者は食事の量を節することを意味する。第四章に説くのは(1)戦闘のための武器 sathā, (2)人、奴隸 satta, (3)肉 māmsa (4)酒 mañja, (5)毒 viṣa を売ることを止めることである。(2)の中には人間の労働を搾取することも含まれる。以上五種の商いを止め、中正な法にしたがって生活を送る人の在り方を「優婆塞の蓮華」と呼んでいるのは、浄土教という「人中芬陀利華」を思い起させる表現である。この章までは「不善を滅する」道を説くのであるという。

それに対して、第五章では「善を養う」道として、十福業事を説く。(1)施、(2)戒、(3)修習、(4)崇敬、(5)奉仕、(6)徳の廻施、(7)他の徳を悦ぶこと、(8)聞法、(9)法を説くこと、(10)「悪」見を正すこと、である。(1)は三宝に対して施をなそうとし、また、

慈悲心をもって他者に必要なものを与えようとする、(2)は第二章に説かれるような戒を守ろうとすること、(3)は四十業廻に対して静慮をなそうとすること、(4)は三宝・父母・年長者・修行者に対し崇敬をなそうとすること、(5)は前項に加えて、他国人、旅に出んとする人、病人、老人、弱少者に対し奉仕をなそうとすること、(6)はある人が為した善の行為に加わり、共にその徳を享受するように、他の人に請おうと欲すること、(7)は他の積んだ福徳の果を共に享受しそれを悦ぼうとすること、(8)は法を聞こうとすること、(9)は慈悲の心をもって人に法を説こうとすること、(10)は正見すなわち四諦の認識を確立しようとする、である。第六章は、道を行う上の障碍を明し、そのような障碍を離れた修道にふさわしい環境に身を置くことを勧める。特に悪友に近づかぬことが強調され、聖者の中傷することと五無間業(殺母・殺父・殺阿羅漢・出佛身血・破僧伽)の罪の重さが説かれる。第七章は、善業の果として欲界の天処に生れること、色定の果として色界に、無色定の果として無色界に生ずることを説き、また、不善業によって悪趣に生ずることを説く。悪処にあつては菩提を求めぬ心を起し難いから、人はよろしく罪業(Papa)を抑制して福業(Puñña)を行じ、善処に赴くべきである。

第八章は、ただ菩提によってのみ三界の輪廻を離れ得ることが説かれる。菩提には声聞の菩提・縁覚の菩提・正等菩提の三種がある。最高の声聞菩提 aggaśāraṅkabhūti に至るには一阿僧祇百千劫の、縁覚の菩提に至るには二阿僧祇百千劫の、正等

覺に至るには少くとも四阿僧祇百千劫の時を要し、その間にもろもろの波羅蜜 *parāmi* を満足せねばならない。正等覺に至るのに少くとも四阿僧祇百千劫を要するというのは、それを目指す菩薩の資質によって要する時間に差違があるからである。もし菩薩が慧において特に勝れている場合は四阿僧祇劫で足りるのである。もし菩薩が信において特に勝れている場合は八阿僧祇劫を、精進において特に勝れている場合は十六阿僧祇劫を要するのであるという。声聞の菩薩は預流、一來、不還、羅漢の四段階をもって説明される。一來向の中で一種子 (*ekabiñ*、有部阿毘達磨でいう一間 *ekavīcika*)・家家・極七反の種類を分けているが、これは有部阿毘達磨の仕方とは相違する。

第九章は無我に関する論議で、俱舍論の破我品を思わせる内容である。常一主宰の我の無いことと、業因、業果の相統を認めることとの、一見矛盾と見える関係について説明がなされる。この章には、パーリ阿毘達磨では用いられない「分別 (遍計所

執) *parikkapita*」とか「因縁和合 *hetupaccayasamaggi*」とかいう語が用いられていて注目される。

## 5

以上、U J の内容を概観した。筆者の狭い知識では、北伝の佛教に、これに対比せられるような、在家者のための教説の撮要書が存するかどうか、詳かでない。ただ、その標題の類似から、かりそめに曇無讖訳優婆塞戒經 (これは漢訳大藏經の中で律部に取められているが、必ずしも律典と見る要はないと思われる) と U J とを比較して見ると、時に共通な要素があって興味をそそられる。例えば、優婆塞戒經の淨三帰品と U J の第一章、八戒齋品・五戒品と第二章、三種菩提品と第八章、受戒品の一部と第五章の (4)、供養三宝品と第五章 (1) (2) の一部、などの如きである。

(14×21.5cm; x + 372 p., Pali Text Society, London, 1965)